
素直の魔法

春野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直の魔法

【Nコード】

N9211A

【作者名】

春野桜

【あらすじ】

「キレイの魔法」番外編、美央と稔のその後編です。年下の稔に片思いする美央。親友咲子と兄信也の四人で海に行く予定を立てたけど、ちょっとしたトラブルが起きて……。

1 〽年下の男のこゝ(前書き)

この小説は「キレイの魔法」の番外編です。この小説だけでも読むことができますが「キレイの魔法」を読むとより楽しめます。(＊

^
| ^＊
)

1 年下の男のコ

今日も、私は翻弄される。

「みーおーちゃんっ」

その愛らしい笑顔と。

「今日も可愛いね」

小憎たらしい程の余裕を抱えた台詞に。

——私は、慌てる他ないんだ。

「み、稔くん！ 静かにしてよっ」

ここはとあるカフェ。

席に一人で座っていたら、待ち合わせをしているうちの一人である稔くんがやってきた。

来た早々大きい声で名前を呼ばれるし、可愛い発言されるしで私はつい慌ててしまった。

うう、まわりの目が痛いよ。

けれど稔くんはそんなの気にする様子もなく、私の横に座る。

「咲子たちはまだ来てないんだな」

咲子……というのは稔くんのお姉さんであり私の親友だ。

ちよっと天然が入った可愛い子で、思わず守ってあげたくなるような女の子。

実は私のおにちゃんと、付き合っていたりもするんだ。

「あともう少しで来るって、さっきメールきたよ」

そう言いつつも私は、隣に座った稔くんをついつい意識してしまう。

——そう、私山田美央は高校一年生なのに、この三つ年下で中学一年生の神崎稔くん片想いをしている。

咲子と友達になったことがきっかけで稔くんと知り合ったんだけど、まさか好きになっちゃうなんて……。

好きになったきっかけなんて、覚えていない。

ただ、彼の生意気な態度や大人びた台詞に、私はいつもドキドキさせられるんだ……。

と、その時。

「あ、咲子たち来た」

稔くんがそう言った。

カフェの入口に目をやると、咲子と私のおにいちちゃんが仲良く手を繋いで入ってきた。

「よ！お待たせ」

おにいちちゃんが手を振って席にまでやって来た。その斜め後ろには可愛い咲子。

「美央、稔、待たせちゃってごめんね」

すまなそうに笑う咲子。

「ううん、全然待ってないから大丈夫だよ」

咲子はすぐく人に気を使う子だから、私は笑ってそう言ったが、しかし。

「咲子遅いぞ！おおかた信也さんとイチャついてたんだろう」

私の隣の稔くんがビシッとそう言った。

信也さん……てのは、私のおにいちちゃんです。咲子の彼氏である、目の前にいるでっかい男のことだ。

「み、稔！」

慌てふためく咲子。

「お、稔くん正解だぞ」

あっけらかんと答えるおにいちちゃん。

——ううーん、この二人って、面白い……。

……じゃなくて！

今日の目的を果たさなくちゃ！

「はいはい、とりあえず飲物注文して、話しよーよ！」
私はそう言うと、立っている咲子とおにちゃんを座らせてメニューを開いた。

今日の目的……てのは、一週間後に控えた海旅行の話。

私たちの親戚が経営している民宿が海の近くにあるから、この四人でお泊りしに行くことにしたのだ。

今日はそれについてのちよつとしたお話をする予定だった。

とりあえずぱっぱとドリンクを頼むと、私は地図を広げた。

「んとね、その親戚の民宿がここね。小さいけどそれなりに流行ってるから、泊まるのに実は条件出されちゃったの」

「え、条件？」

何も知らない稔くんと咲子は身を乗り出して聞いてくる。

おにちゃんは条件をおじさんたちから聞いて知っているから、苦い顔をしている。

私はすまなそうに言った。

「タダで泊まらせるかわりに夕食の準備手伝ってほしいって。この時期、かなり忙しいんだって」

すると、稔くんが「ゲッ」と言った。

「じゃあ俺らの夕食は!？」

「ちよつと遅くなるけどちゃんと出してくれるよ。八時くらいになっちゃうかな」

「まじかあ……」

少しだけ沈む稔くん。

うう、やっぱ申し訳ないなあ。

タダっていうのは魅力的だけど、やっぱ働くのは嫌だよねえ……。けれどそこで、この四人の中で一番生真面目な咲子が稔くんを一喝した。

「こら稔! そんなこと言わないの! こっちはタダで泊まらせていただくんだから」

咲子がそう言うと、稔くんは「はあい」とちゃんと返事をした。

ふふ……何だかんだで、咲子には弱いんだよね、稔くんは。

何だか微笑ましくなっちゃって稔くんを見つめていたら、稔くんが目が合ってしまった。

稔くんは一瞬バツが悪そうな顔をして……しかし次の瞬間、ニヤリと笑った。

「そうだな……今のうちに美央ちゃんの親戚にもイイ印象与えとかなきやな！」

「ええ!？」

なぜ突然そんな考えに落ち着くのか。

稔くんの思考回路は、全然わからない。

「こ、こら!稔!」

「あっはっは!そりゃいい考えだなぁ〜咲子ちゃんも頑張れよ!」
「し、信也さん!」

慌てる咲子と呑気なおにいちゃん。

ああ……この四人で海旅行だなんて……ホントに大丈夫かしら。
やれやれ。

2 〽いつか、君に素直に〽

カラッと晴れたある日の午後。

私は咲子と一緒にショッピングをしていた。

今日の目的は水着を買うこと。

テストやバイトや塾で忙しかった私たちが合う日がなかなかなくて、こんなギリギリになってしまった。

「あ、美央可愛い〽」

フィッティングルームから出てきた私を見て、待っていた咲子が歓声をあげた。

私はピンクのドット柄の水着を試着していた。肩紐を首の後ろで結ぶタイプだ。

「やっぱこれいいな〽これにしちやおうかな」

鏡とにらめっこしながら私は悩む。

ちよつと値ははるけど、やっぱり可愛い！

「美央は何でも似合うよ」

咲子が嬉しいことを言ってくれる。

うう〽、咲子なんていい子なの！大好き！

「咲子はいいい水着見つけた？」

「うん、これ試着してみる」

そう言っ咲子を持ってる水着を見ると、真っ白なフリルの水着だった。

清楚な感じで、咲子にはぴったりだ。

「いいじゃんいいじゃん！着てみなよ〽」

咲子とのショッピングはやっぱり楽しい。

その後私たちは互いに試着した水着を購入すると、とあるカフェに向かった。

その名も『エデン』。

実は咲子とおにいちやんのバイト先だったりする。

咲子たちったら、バイトでもラブラブなんだから！

ナチュラルな造りの扉を開けると、涼しげな鈴の音と甘いケーキの匂いが私たちを迎えてくれた。

「いらっしや……あら！美央ちゃんと咲子ちゃんじゃない！」

そう言って満面の笑顔で出迎えてくれたのは、このカフェの店長内山さんだった。

女言葉を使う店長は実は、カッコいいお兄さんだったりする。

「店長こんにちはっ」

二人して元気よく挨拶をする。

私も咲子も、店長が大好きなんだ。

「あら二人とも、袋持ちちゃって。今日はショッピング？」

さすが店長、めざとい。

私はニコニコしながら答えた。

「うん！今日は水着買ってきたの。楽しかったよ」

「やーんもう！私も混ぜてくれればよかったのに」

そう言う店長は男前なのになぜか愛らしい。

やっぱり人間、中身が外に反映されるのかな。

なんてことを考えつつ私と咲子はテーブル席につくと、それぞれドリンクを注文した。

本当はケーキも頼みたかったけど……水着を着る日も近いし、今は

我慢、我慢！

我慢、我慢！

私と咲子は向かい合いながら、たわいもない話に華を咲かせていた。

「いい水着買えてよかったよねー。咲子の白のやつなんて、ほんとぴったりだし！」

「でもちよっと可愛過ぎて、水着に負けちゃいそう」

「そんなことないよう！試着した時もすごい似合ってたし！」

もう、咲子ったら本当に謙虚なんだから。

素直で可愛い咲子の唯一の欠点を挙げるならば、この自信のなさな

のかもしれない。

入学したての頃はまだオシャレに目覚めていなかった咲子に、あれこれアドバイスをしたのは実はこの私。

昔、私も冴えない女の子だった。

でも美容師を目指していたおにいちちゃんに沢山の「キレイの魔法」をかけてもらって――今では、自信を持っていられるんだ。

だから、オシャレに不器用だった咲子が気になったんだろうな……。まあ今ではそんなの関係なく、咲子が大好きなんだけどね。

「咲子もっと自信持っていていいよ！あの水着着たらビーチの視線一人占めだよ！」

咲子を励ますべくそんな風に豪語していたら……。

「な、なんだってえゝ！？」

変な声が背後から聞こえた。

その声の主は……。

「おにいちちゃん！」

「し、信也さんっ」

私たちにドリンクを運んできたバイト中のおにいちちゃんだった。

トレーがカタカタと震えている。

「さ、咲子ちゃん！そんなに派手な水着にしちゃったの！？」

「ええ！？そんなことないですよ！」

「でも今『ビーチの視線一人占め』って！ま、まさかビキニなのか！？」

おにいちちゃん……そんなことより早くドリンク配ってよ。ああ、零しそうっ。

「今時ビキニじゃない方が珍しいよ、おにいちちゃん。大丈夫、咲子の水着はスカートもついてるし……」

「そういう問題じゃないぞ、美央！」

じゃあどうい問題なのか。

おにいちちゃんはトレーごとテーブルの上に置くと、咲子の肩をしっかりと掴んだ。

「いいね、咲子ちゃん！当日はパーカーをちゃんと着ること！あと俺の傍から離れないで！」

そう言うおにいちゃんの目は真剣だ。

もう、おにいちゃんてば過保護なんだから！

——けれど、どうやら咲子のが一枚上手だったらしい。

咲子は少し悲しそうにこう言った。

「信也さんは私の水着姿見たくなかったですか？」

「えっ……いや……」

戸惑うおにいちゃん。

「見たい……けど」

「ならよかった、ちょっと不安になっちゃいました」

——うーん……咲子って実は小悪魔系なのかも？

でもこれが計算されてやってるんじゃないかって、天然だから余計に質が悪いのかも。

でも、羨ましいな。

あんな風に、素直に相手に気持ち言えて。

私は……意地っ張りだから。

——美央ちゃんの悪いところはプライドが高いところと欲張りなところだな——

これは以前、稔くんに言われた台詞だ。

私と咲子がケンカをした時に、稔くんは仲を取り持ってくれた。その時に言われたんだ。

年下のくせに、生意気って思った。

でも……言ってることは的を得ていて。

まるで私の全てを見透かしているかのような稔くんの目を、意識す

るようになったのはそれからだ……。

（でも稔くんって、何考えてるのかいまいちよくわかんないし……）
天真爛漫。

人をおちよくるのが大好き。

んでもって女の子も大好き。

いつもハーレムに囲まれてる……て、確か咲子が以前言っていたよーな。

私のことを会う度に「可愛い」って言うってくれるのは嬉しいけど、素直に喜べないのはきつと、そのせいなんだろう。

だから私は稔くんの前ではいつも素直になれない。

こんな、咲子とおにいちちゃんみたいに自然体でいられる間柄にはなれない。

（羨ましいなあ……）

目の前で笑い合っている咲子とおにいちちゃん。

もう以前みたいなヤキモチは妬かなくなったけど、羨ましさだけが増していく。

いつか、私も。

稔くんの前で素直に笑えたらいいな……。

海旅行前日の夜。

私は荷物いっぱいの特ランクと、格闘していた。

「あーん！入らないっ！」

ググツと無理矢理押す。

二泊三日の旅行なのに、特ランクに入りきらないとはどういうことか。

「もーちよつと……」

あと一押し！……という時に、携帯電話の着信音が鳴り響いた。
(もう誰よ、こんな時に！)

しかし携帯電話のディスプレイを見て私のそんな怒りはなくなった。
稔くんだったからだ。

「も、もしもし！？」

慌てて私は電話に出た。

背後からはバフツとトランクから荷物が溢れ出す嫌な音が聞こえた。

『あ、美央ちゃん？今よかった？』

稔くんの柔らかい声が、私の耳をくすぐった。

「う、うん、大丈夫だよ」

なぜか正座してしまう私。

「稔くん、どうしたの？」

『んー……別にただ、美央ちゃん何してるかなあって思ってた』

「！」

——もう、どうして……こんなに恥ずかしいことをサラっと言えるの！？

私がそんな何気ない一言に一喜一憂していることを、稔くんはわかっているのかしら。

『準備はできた？』

「今してたとこだよ。稔くんは？」

『俺は今終わったところ』

そんな風に言う稔くんの表情が浮かんで、思わずにやけてしまった。
電話って、不思議。

直接会って話してる時よりも、声がすごく近くに感じる……。

その後私たちは取り留めのない話をした。

明日の海楽しみだね、とか。

ビーチバレーとかしようね、とか。

そんな何気ない話ばかり。

でもそれがすごく……幸せな時間だった。

『……あのさあ、美央ちゃん』

ふと、稔くんが呟いた。

「ん、なあに？」

私は何気なく答えた。

稔くんは少しだけためらって……。

『やっぱ何でもない』

そう言った。

「何それー」

『やっぱ言うのは旅行中がいいかなって思って』

「えー何なに。すぐく気になるんだけど！」

……ひどいな稔くん。

そんな気のあるみたいな素振り見せて。変な期待しちゃうじゃない。

どうせ、無駄な期待なのに――。

でもそう思う気持ちと心は別物で。

私の心臓は、ドキドキしっぱなしで仕方なかった。

結局稔くんとは三十分も話をしていた、荷物の準備を再開するのが遅くなってしまった。

明日は早起きしなくちゃいけないのに。

ああ、でも……。

どうやら今夜は……眠れなさそうだ。

3 いざ到着！

——夢を見ていた。

『美央ちゃん』

その中で私は中学生で。

『大好きだよ、美央ちゃん』

同い年の稔くんと、同じ制服同士で下校デートをするなんていう、有り得ない夢を……——。

「——お、美央」

遠くから聞こえる、私を呼ぶ声。

「んー私も……大好きい……」

まだ甘い夢の中にいる私を揺さ振るのは……。

「美央起きて！着いたよ！」

「うにゃ!？」

目を覚ますとそこには咲子の顔が。

そして私は思い出す。

約二時間前に、おにいちやんの運転する車で私と咲子と稔くんの四人で、おじさん達の運営する民宿に向かっていたことを——。

どうやらいつの間にか私は寝てしまったらしい。

「あ、ごめん」

慌ててヨダレなんか出てないか確かめる。

後ろではおにいちちゃんと稔くんが荷物を下ろしていた。

も、もしかしなくても……稔くんに寝顔見られたよね!？

うう、恥ずかしいっ。

「咲子ー私変な顔してなかったあ?」

どんな夢を見ていたのかも忘れてしまったが、何だかすごく幸せな夢だった気がする。

絞まりのない顔で寝ていたような気がして、顔を赤らめながら咲子に聞いた。

「可愛い寝顔だったよ」

咲子はニコツと笑ってそう言う。

うう、咲子、本当のことを言ってえ。

しかしいつまでも車の中にいるわけにもいかないので、私はとりあえず車を出た。

すると少しだけ肌寒くなった空気に、潮の匂いを感じた。

「わあ……」

後ろを振り返ると海が見えた。

キラキラ光る水面が、とても綺麗。

前方にはおじさんたちの経営する民宿がどんと経っていた。

築十五年の、一見したら少し大きいだけの普通の家にしか見えない民宿だ。

おじさんとお婆さんが、ニコニコと私に駆け寄ってきた。

「やあ美央ちゃん久しぶり、大きくなったね」

「豊おじさん、久しぶりです」

豊おじさんは相変わらずただでさえ細い目をますます細めて笑っている。お母さんの弟なんだけど、やっぱ全然似てないなあ。

そんな豊おじさんの後ろでは、お婆さんが荷物を運ぶおにいちやんと穂くんに声をかけていた。

「荷物は二階に運んでね。一応男の子と女の子で部屋は分けてあるから」

「はい」

穂くんは元気良く返事をして荷物を持ち上げた。

うわ、穂くんって結構力持ちなんだなあ……。

あんな大きい荷物を、片手で持ちちゃって。

そんな風に穂くんを見ていたら、何だかドキドキしてしまった。

別に、この旅行で稔くんとうこう……なんて思っていないけど、やっぱり期待してしまう。

できれば……。

この二泊三日で、稔くんと素敵な思い出を作れたらいいなあ……なんて、思ってしまう。

「美央、ぼさつとしてないで手伝えよ」

そんな良からぬことを考えている私の頭を、ポンッとおにいちゃんが叩いた。

「いったーい！分かってるわよう」

もう、おにいちゃんたら乱暴なんだから！

でも、稔くんを好きになるまでは私かなりのおにいちゃんっ子だったのになあ。

今では稔くんのことばっか考えてる。

——恋愛って、不思議。

なんてことを考えながら、私もいそいそと荷物運びに加わった。

明日泳ぐから、今日は海に行く予定はないけど、皆で買ってきた花火を浜辺ででもしようかな……。

そんなことをウキウキと、考えていた。

4 ～二人きり～

二泊三日の海旅行。

けれど一日目はほとんど旅館のお手伝いで台なしになった。

まあ一日目をお手伝いで潰すかわりに、二日目は一日中遊んでいい、てことになったんだけどね。

咲子の言ったとおり、私たちはタダで泊まらせてもらってるんだから仕方ないかなとほほ。

「あれ、咲子ー？」

一人だけ長くお手伝いをしていた私が部屋に戻ると、先に部屋に戻ったはずの咲子がいなかった。

二人でおにいちちゃんたちの部屋に行こうって言ったのに……もしかして、先に行ったのかなあ。

私は再び扉を閉めると、向かいの部屋の扉に目をやった。

おにいちちゃんと稔くんの部屋。

コンコン、とノックをすると「はーい」という稔くんの声が聞こえた。

少しだけドキッとしたが、慌てないように深呼吸してから扉を開けた。

「お邪魔します。……あれ？」

中に入ると、そこには稔くんが一人いただけだった。

「よ、美央ちゃん」

テレビをどうやら観ていたらしく、就寝用に準備された布団にごろ

んと寝転がっている。

……親父くさいよ、稔くん。

「おにいちゃんと咲子は？知らない？」

稔くん一人だとわかったら、なぜか部屋に入ることができなくなつた。

顔だけ覗かせて、稔くんにそう聞いた。
すると。

「ああ、咲子と信也さんなら二人で海行ったよ」

「ええ！？」

私にとっては衝撃的な事実を突き付けられた。

ふ、二人で海へ！？

だって今、夜の八時だよ？外ももう暗いの！

それに後で四人で花火しよう、て言ったのに……。

「美央ちゃんそんな顔すんなって、二人きりにしてやろうよ」

「だってえ」

何か納得いかない。

なんてことを考えていると、稔くんが私を手招きした。

——え、入っていいの？

ドキツとする。

だってこの部屋、稔くんしかいないのに……。

部屋に入りたいような、入りたくないような複雑な緊張をしてしまった私に、稔くんは苦笑してこう言う。

「俺寂しいから一緒にいてよ」

——稔くんって、やっぱり女たらしかも。

こんな台詞をさらっと言えるんだから。
でも……。

「う、うん……」

不覚にもかなり赤面してしまった私は、部屋に入るしかない。
半端に開いた扉を開けて、中に入る。

「お邪魔しまゝす……」

部屋に入ると稔くんがポンポンと自分が転がっている横を叩いた。
そこに座れてこと？

でもそこ、布団の上なんだけど……！

（でもまあ、あんまり緊張してもいけないか）

私のが年上なのに緊張しているのが何だか悔しくて、私はそう思い直して稔くんの横に座った。

ちよこん、と何故か体育座りになる私……。

「ぶっ……何で美央ちゃん体育座りなわけ？」

「い、いいでしょー別に！これが安心するの！」

まだゴロンと布団に寝転がる稔くんは猫みたい。

腹ばいになって肘をついて、上目遣いに私を見つめてくる。

（ううっ……何話そう）

咲子とおにいちゃんの馬鹿！

二人だけで海行くななんてずるいよ！

ていうか……羨ましい！

「……羨ましいよな」

「え！？」

一瞬、私の心の声が聞こえたのかと思って思わず稔くんを見た。

（も、もしかして私知らない内に口に出してた！？）

……と思ったけど、稔くんはあさつての方向を見てぼんやりとしている。

私が稔くんを驚いた目で見つめていることに気付いているのかはわからないけど、こんなことを言う。

「羨ましいよね、咲子と信也さん」

——それは、今まさに私が考えていたことだった。だから。

「う、うん……」

私にはそう言うことしかできなかった。

すると稔くんはまた布団の上で転がり、今度は仰向けになる。

「美央ちゃんはさあ、今彼氏いるの？」

「え！？」

仰向けになった稔くんは、私を見つめながらそんなことを聞く。

「……いない……けど」

——なんで、そんなこと聞くの……？

徐々に心臓が激しく鳴り始めたのがわかった。

「そっか、いないんだ」

そう言う稔くんの意図がわからなくて、私は困惑する。
どういうつもりで聞いたの……？

「稔くんは？」

焦る心とは裏腹に、私は平常心を装ってニコリと聞いた。

「俺？ ガールフレンドならたくさんいるけど、彼女はいないな」

「へーいないんだあ」

「俺はみんなの稔くんなの！」

「あはは、何それ」

（そっか、いないんだ……）

ついついホッとしてしまう。

「てゆーか俺、付き合ったことないよ」

「え、そうなの？」

「だって俺まだ中一よ？」

「ま、まあそうだけど」

へえ……付き合ったことないんだあ。

稔くんませてるから、絶対過去に彼女とかいると思ってた。
なんか、意外。

「実は俺シャイなんだよ」

「シャイな子に取り巻きなんている？」

「あ！ ひっでー！」

稔くんはバツと身を起こす。

「そういう美央ちゃんこそどうなんだよ!？」

「え？」

ずい、と稔くんの顔が近づいた。

「咲子が言ってた。美央ちゃん学校でモテモテなんだろう？」

モ、モテモテって……。

そんなことよりも、稔くんの顔が近すぎて私は平常心を保つのに精一杯だった。

うわぁ……稔くんって、やっぱりカッコイイのかも。

今はまだ幼いから可愛い感じだけど、もう少し成長したら、きっと男らしくなってカッコよくなる。

……って、そんなこと考えてる場合じゃなくて!

「み、稔くんには関係ないでしょ!」

慌てていた私は顔を逸らしながら、ついそう言ってしまった。

あ……何か、ヤな言い方したかも。

しまった、と思い稔くんを見た。

すると気のせいかな、少しだけ不機嫌そうな稔くんの表情がそこにあった。

「ふーん……」

目を細めて私を見る稔くん。

——お、怒ってる？

稔くんは近づけていた身体を離すと、またゴロンと布団に転がり私に背を向けた。

やだ……これって、絶対怒ってるよね!？」

「み、稔くん？」

「俺には関係ないんですよ。ほっというてよ」

初めて聞く冷たい声。

そんな……。

ちよっとした一言でこんなに態度を変えた稔くんに私は混乱した。

何でそんな態度をとるの？

やだ……。

背中を向けなくてよ……。

どうしたらいいのかわからない。

声をかけるべきなのか、かけちゃいけないのかわからなくて、泣きそうになってしまう。

稔くんは、嫌われたくないよ……！

ぎゅっと目を閉じた――その時。

「……………ごめん」

稔くんの小さな声が、聞こえた。

背中を向けたまま、稔くんが呟く。

「別に何でもないから、気にしないでいいよ」

……………何でもない？

嘘。

なら何で、こっち向いてくれないの？

本当は、稔くんにそう言いたい。

でも素直になれない私は……………稔くんが見ているわけでもないのに、愛想笑いを浮かべてこう言う。

「う……………うん！気にしてないからいいよ」

嘘だよ。

本当はすごく、気になるよ。

「えっと、私そろそろ部屋……………戻るね」

何だかいたたまれなくなったら私は、立ち上がってそう言った。

稔くんはまだ背中を向けたまままだ。

「じゃあ、おやすみなさい！また明日ね」

せめて、元気よく。

傷ついてるのを悟られないように。

私は稔くんの背中に寂しさを感じながらも、笑顔で部屋を出て行った。

何で突然こんな流れになったのか……混乱した頭ではまだ考えられなくて。

部屋を出た途端泣きそうになって、私は慌てて自分の部屋に戻った。だからその後の、稔くんの呟きは私に届かなかった。

「俺って……カッコわりい……」

部屋に戻った私。

へなへな、と布団に力なくダイブした。

「……何でこうなるのお……」

突然不機嫌になってしまった稔くん。

原因は多分、私の「稔くんには関係ないでしょ」発言のせいなんだろうけど……でもあんな態度取られるなんて。

（でもあれで不機嫌になるってことは、私のこともしかして……）

いやでも、稔くんってA B型の気分屋さんだし。

何だかもんもんとする。

考えても答えは出ない。

頭がショートしそうになっていると、部屋の扉が開いた。

咲子が、帰ってきた。

「あ、咲子！」

私は布団から身を起こした。

「美央、お手伝い終わったんだね。お疲れ様～」

そう言って部屋に入る咲子。

あれ？

何か顔が赤い……？

「……咲子、何かあった？」

「え！？な、何で！？」

慌てふためく咲子に、ピーンときた。

そりゃそうか。

おにいちちゃんと二人きりだったわけだし、何もないわけないんだよね。

「いいなあーラブラブできる相手がいて」

「み、美央！」

真っ赤になってそう咲子はすごく可愛い。

いいなあ、咲子。

好きな人と両思いで、ラブラブできて。

私なんて片思いのうえ、何故か変な展開になっちゃってるし……。

「咲子」

「な、何？」

私はよーし、と意気込んで言った。

「明日の海、とことん楽しむよ！！」

「う、うん！」

おー！と手を上げる私につられて咲子も手を上げる。

こうなったら明日の目標は「稔くんと仲直りして更なる親睦を深める」だ！

今日のことをバネにして、明日は明日また頑張ればいいんだし！

前向きモットーの私に凹んでる暇なんてない。

とりあえず明日は、朝一で稔くんに謝ろう。

それで、海では稔くんといっぱい遊んで仲良くなるんだ！

そう決めたら頭の中がすっきりした。

私は起き上がると、咲子にニコツと笑った。

「咲子、それじゃあさ」

そしてニヤリと笑う。

「ラブ話聞かせていたどうか」

「え、ええ!？」

私を置いてった罪は重いよ、咲子。

とりあえず私は咲子の顔が赤かった理由を追求していくことにした。

今日も夜更かし、しちやいそうな予感……。

5) enjoy in the sea !

青い空。

白い雲。

きらめく水平線の目の前には、そんな夏の海を謳歌する人たちが水着姿で賑わっていた。

そんな中、もちろん私たちも……――。

「きゃー、冷たいっ」

「でも気持ちいいね」

私と咲子は久しぶりの海に触れ、はしゃいでいた。

まだ浅瀬ともいえるそこでは、膝くらいにしか水面はきていない。

そんな私たちにおにちゃんが近づいてくる。

肩には大きなビニールボードをかついで。

「これいる？」

そう言うっておにちゃんはビニールボードを海に投げる。

「あ、いるいる！おにちゃんありがとう」

早速そのビニールボードに乗る私と咲子。

ゆらゆらした不安定なバランス感が面白い。

私はそんな風にはしゃぎながらも、視線を辺りにまわしていた。

……実はさっきから気になっていた。

「ねえ、稔くんは？」

一緒に海にまで来たはずなのに、水着に着替えたあとから稔くんの姿は私の前から消えていた。

そのうちひょっこり現れるかな、と思っていたけれど、まだ姿が見えないから不安になってきてしまった。

私に尋ねられたおにいちゃんは首をひねった。

「さあ？何か着替えた後用事あるから先行ってて、て言われたんだけどさ」

……用事？

こんな海に用事って何なんだろう。

稔くんの行動はイマイチわからない。

(……もしかして)

——昨日私が怒らせたから、私に会いたくないとか……？

ツキン、と胸が痛んだ。

そんな風には考えたくないけれど、昨日確かに稔くんは怒っていた。今日いっぱい遊んで仲直りすればいいか、なんて私は考えていたけれど、もしかして安易に構えすぎていたのかな……？

(稔くん……)

もしかして私……嫌われた……？

胸の痛みが、不安の苦しさに変わろうとした——その時だった。

「それっ！」

「きゃあ!？」

「うわっ」

バシャーン!!

……と、私たちのまわりに水飛沫が飛びはねまくった。

まだ足しか濡れてなかったのに、私も咲子もおにいちゃんも、その衝撃でびしょ濡れになった。

突然の出来事のあとに、満足そうに笑う聞き慣れた声が聞こえた。

「へっへっへっ、さすが稔くん！命中率百パーセント！」

そこにはまるでバズーカのような大型水鉄砲をかついだ稔くんが、

してやったりの顔で笑って立っていた。

悪戯っ子のように笑う稔くんはその姿が、あまりにもよく似合う。

「み、稔！」

咲子は仰天したように叫ぶ。

一方おにいちちゃんは、稔くんの持つ水鉄砲を見た途端キラキラ目を輝かせた。

「お！それって今噂のウォーターバズーカシリーズの最新モデルじゃないか！？」

「あ、やっぱ信也さんお目が高いねー！」

稔くんは得意げにまた水鉄砲（ウォーターバズーカ？ていうのかな）を担ぐと、それを私に向けた。

「ほら美央ちゃん、いっくよー」

「え！ちよ、まっ……」

逃げようとした私目掛けて、稔くんは容赦なく水鉄砲を発射した。

「それ！」

「きゃあー！」

水鉄砲は私付近の水面を打ち、思い切り飛び散った飛沫に私はびしょ濡れ。

もちろん近くにいた咲子も。

「やー、メイクがあー！」

「びしょびしょ……」

私と咲子は顔を気にしながら嘆いた。

けれど稔くんは顔をくしゃくしゃにして笑ってこう言った。

「せっかく海にいるんだからメイクとか気にしてちゃ損だって！それよりも遊びまろーよ！」

そう言って笑う稔くんはまるで太陽みたい。

眩しくて、可愛くて、私は思わず目を細めた。

……大丈夫、稔くんは怒ってない。

それどころかこんな風に、昨日ぎくしゃくした私との距離をなくそうとしてくれている。

そう思ったら、心のわだかまりがスツと消えた。

「もうよくもやったわねえ！おにいちちゃん、稔くんをビニールボードに乗せて！」

「了解！」

さすがは私のおにいちちゃん。

それだけで私が何を企んだかわかったらしく、ニヤリと笑うと稔くんを肩にかついだ。

「へ？」

ちよこんとビニールボードの上に乘せられた稔くん。

ビニールボードの横に手をかけた私とおにいちちゃん。

きよとんとそれを見守る咲子。

私はおにいちちゃんと目を合わせると合図を口にした。

「……せーの！」

ぐい！とビニールボードはひっくり返され。

「わあああ！？」

バsshャーーン！！

稔くんはあえなく海に消えたのであった。

さあ、遊びまくるぞー！

6 小さなナイト

「美央ちゃん、あとで二人で花火しようよ」

……なんて言うから。

今回の旅行では期待してなかったことを、期待しちゃうじゃない。
稔くんはバカ。

頭の上には満天の星空。

たぶん、都会に住んでちゃ一生見られない空だ。

「キレ……」

海岸で一人佇む私は、そんな星空を眺めていた。

まわりには誰もいない。

「稔くん、まだかなあ……」

海ではしゃぎまわった今日。

水鉄砲したり、ビーチバレーしたり、かき氷食べたり……本当に楽しかった。

夕日が傾くころには稔くんとのわだかまりもすっかり消えていて、私はとにかく嬉しくて楽しかったんだ。

そして、海から上がる時。

稔くんは、おにいちちゃんや咲子に聞こえないように、私だけにこう言った。

『美央ちゃん、あとで二人で花火しようよ』

悪戯っぽい可愛い笑顔。

もちろん私は驚いた。

『え！？な、何で！？』

本当はめっちゃくちゃ嬉しいのに、素直になれない私にはそんな気のきかない台詞しか言えなかった。

『だって咲子たちは昨日二人で楽しんでたじゃん？だから今日は俺たちが楽しもうよ』

ね？と笑う稔くんはとっても楽しそう。

……多分、深い意味はないんだろうけど。

好きな人から誘われて、期待しない女の子なんていないと思う。

だから、もちろん。

『うん……』

頷いてしまった私。

恥ずかしくて稔くんの顔を見れなかったけど、嬉しそうに笑ったのは……気のせいじゃないと思う。

だから淡い期待は夜になるにつれ膨れ上がり。

咲子に適当に言い訳を言って部屋から出た頃には、頭の中は妄想だらけだった。

もしかしたら。

ひよっとして。

有り得るかもしれない！

……な～んて、張り切って来たのに。

「うう～遅いっ！」

約束の時間を十分過ぎても、稔くんはまだ姿を現さなかった。

一人寂しく立つ私、ちよっと可哀相なんじゃない！？

（も～、稔くん何やってるんだろお）

稔くんとは咲子やおにいちちゃんとよく出掛けたから、待ち合わせは結構したことがある。

今までこんな風に遅れることなんてなかったのに。

（何かあったのかなあ……？）

こんなことなら携帯電話部屋に置いてくるんじゃないかな。もうちょっと待ってみて、来なかったら部屋へ行ってみよう。

そんな風に頭の中で段取りを考えていた……その時。砂を踏む足音が背後から聞こえた。

（あ、稔くんだ！）

そう思いつい笑顔で私は振り返った。

――が。

「お！可愛いっ」

「何なに、彼女一人なの？」

そこにいたのは、ガラの悪そうな男の二人組だった。

ピアスやタトゥーが目立つちよつと恐そうな感じで、私は思わず固まった。

（嘘……！）

今、私は一人。

二人の男は私をはさむように立ち、近寄ってきた。

「なーんか寂しそうだね？相手してあげよっか？」

ピアスを沢山つけた一人はそう言ってニヤニヤ笑っている。

「け、結構です！」

私はそう言って逃げようとした。

……が。

「まーまー、せっかく会えたんだしゆっくりしなっ」

タトゥーが多いもう一人の男に肩を掴まれ、私は逃げられなくなってしまう。

（やだっ……！）

触られた部位に拒否反応が起きる。

元々男嫌いな私。

ナンパやキャッチだけでも嫌悪を感じるのに、あからさまに悪質な

この人たちには嫌悪を通り越して警告が鳴る。

……やばい、やばい、やばい！

きつと今の私は青ざめているに違いない。

そんな私の肩に、男の腕がまわる。

「まあ三人で楽しもうよ」

(や……やだー！)

強張った体を何とか動かし、男を突き飛ばそうとした。
その時。

「美央ちゃん、離れて!!」

稔くんの大きな声。

それと共に、パンパン!と激しい音が辺りに鳴り響いた。

「うお!」

私を捕らえていた男はそれに驚き私から手を離れた。

その隙に私は逃げ、稔くんの方へと駆け寄った。

「稔くん!」

「美央ちゃん、大丈夫?」

稔くんは手に花火とチャッカマンを持って立っていた。

先程の音はどうやらねずみ花火だったらしい。

男たちは突然のことに一瞬我を忘れ、そして怒った。

「何だてめえ!」

「やんのか小僧!」

稔くんは私を後ろにし堂々と立っている。

明らかに二人のが大きくて強そうだ。

それでも稔くんは、毅然とした態度を崩さない。

「嫌がる女の子を無理矢理連れ込もうとするなんて最低だね」

それは聞いたこともない、稔くんの怒りの声だった。

後ろにいる私には見えないけど……稔くん、怖い顔してる……？

「しかも俺の美央ちゃんに手え出そうなんて……絶対許さない」

(え……)

——なんか今、ものすごく嬉しいこと言われたような気がするんだけど。

しかしそんな私の心境を無視して、展開はどんどんやばくなっていく。

「ああん？ ナメてんじゃねえぞガキ」

「子どもだからって容赦しねえぞ」

……これって、すぐくやバイんじゃ！？

だって、どんなに大人びていても。

稔くんはまだ中学一年生なんだ。

なのにこんな柄の悪い男二人組に、喧嘩を仕掛けられているなんて——！

「美央ちゃん、離れないで」

「稔くん……」

じりじりと間合いを詰めてくる二人に聞こえないよう、稔くんがそっと囁いた。

でも私は自分のことよりも、稔くんの方が心配だった。

だってこの二人、稔くんが年下だからって容赦しそうに見えないんだもん……！

「覚悟しろ、チビ」

男の一人がそう呟いた……次の瞬間。

「覚悟すんのはそっちだ！くらえっ！！」

稔くんはそう叫ぶと同時に、いつの間に火をつけたのか、打ち上げ花火やロケット花火を男たちに向けた。

「バツ……！てめえ！」

まさかそんな物を向けられると思っていなかった男たちは目を大きく見開き、そして……。

パンパンパン！！

ヒュー……ドンドン！

「うわあぁっ」

「てめ！洒落なんねーだろ！！」

慌てて避ける男たちに、花火は襲いかかった。

（う、うわぁ……）

ほんの少しだけ、男たちが可哀相……に思えた。

稔くんはそんな二人に冷ややかに言い放つ。

「洒落なんかにしないよ。あんたら美央ちゃんに何したかわかってんの」

もしかして……稔くんって怒らせたものすごく怖いのでは。

でも、私のためにこんなに怒っていることが、私はとても嬉しかった。

小さな稔くんの背中が、すごく頼もしく見える……。

（ナイト……みたい）

私を守ってくれる稔くんの存在が、嬉しかった。

でも。

「調子乗んなよ、クソガキ！！」

花火が切れた一瞬について、男がこっちに突進してきた。

——男の動きは素早かった。

一気に稔くんの懷に飛び込み、稔くんの胸倉を掴んだ。

「稔くん！」

思わずそう叫んだ瞬間。

ガッ……と嫌な音が響いた。

「きゃああ！」

稔くんの頬を、男の拳が捕らえた。

稔くんは砂浜に倒れ、その上に男がのしかかった。

「てめえ、マジぶっ殺す！」

花火がよほど頭にきたのか、男は烈火のごとく怒りながら稔くんにさらなる攻撃を仕掛けようとする。

（……やだ！！）

私は思わず振り上げられた男の腕にしがみついた。

「やめてっ！」

「……てめえはどけ！」

「きゃっ」

ブン、と腕を払われて私は尻餅をついた。

そんな私にもう一人の男が肩に手をかけた。

「まああんたはこっち来なよ」

「やっ……」

（——稔くん！）

稔くんは必死に腕で男からの攻撃を防いでいる。

「美央ちゃん！」

稔くんは自分のことよりも、私のことを心配して私の名を叫んだ。
でも稔くんにも容赦ない攻撃が襲いかかっている。

やだ……。

やだ、やだ！

このままじゃ、私も稔くんも……！！

最悪の事態が頭を過ぎった。

——と、その時。

「何してんだてめえら!!」

聞き慣れた声が、私の耳に飛び込んできた。
この声、まさか!

「おにいちちゃん!」

おにいちちゃんが現れた。

まるで鬼のような顔つきのおにいちちゃんは、私に手をかけていた男の肩を掴むと、そのままガツンと一発を喰らわせた。

「ぐはあっ!」

突然の攻撃に、男はあっという間にくたばってしまう。

一発KOしたおにいちちゃんは、次に稔くんにのしかかった男にも体を向けた。

「な、何だてめえ……!」

突然現れたおにいちちゃんに男は驚いている。

対するおにいちちゃんは、ドスの聞いた声でそんな男に向けて言う。

「それはこっちの台詞だ……花火の音につられて来てみりゃ、妹が襲われてるわ、稔くんは殴られてるわでこっちは驚き通り越してムカついてんだ。……てめえ、覚悟しろ」

パキパキと拳を鳴らすおにいちちゃん。

……ちなみに。

おにいちゃんは今はもうやってないが、柔道、空手に精通している有段者である。

そして一度キレたらなかなか収まらない性格……。

――その後、男たちの悲痛な叫びだけが砂浜に響いたのであった。

7 素直になろう

結局おにいちちゃんは咲子が駆け付けるまで、たつぷりと男二人組を懲らしめていた。

私がどんなに言ってもやめなかったのに、咲子が来た途端やめたおにいちちゃんに、二人の関係が何となく見えた……。

そして、稔くんは。

顔に痛々しい痣をいくつか作って、気を失っていた。

そんな稔くんをおにいちちゃんが部屋まで運んでくれた。

叔父さんと叔母さんはそんな稔くんにビックリして、慌てて手当てをしてくれた。

ちなみに男二人組は警察に通報し、ようやく落ち着いた頃には真夜中になってしまっていた。

私は、稔くんの傍にずっとずっといた――。

稔くんは、気絶したまま寝てしまったのかわからないけれど、なかなか目を覚まさなかった。

そんな稔くんを、私はずっと見ていた。

(稔くん……)

私を守ってくれた稔くん。

そのせいで、怪我をしてしまった稔くん。

すぐく申し訳なくて悔しくて、私はぐしゃぐしゃな気持ちを持て余していた。

傍らにいた咲子が、そんな私を見て声をかける。

「美央、ちょっと休憩したら？ずっと見てるでしょ」

そんな咲子の気遣いは、今の私には悪いけれど無意味だった。

「ううん、いいの」

だって私のせいでこうなっちゃったのに……。

せめて、稔くんが目を開けるまで傍にいたい。

そんなことくらいしか……できないから。

「じゃあ私、何か飲み物持ってくるよ」

咲子はそう言った。

咲子はいつでも、優しい。

「うん、ありがとう」

そう言った私の表情は暗かったかもしれない。

そんな私を咲子は心配そうに見ながら、部屋を出て行った。

部屋には私と稔くんだけになった。

おにいちゃんは海へ散らかった花火を回収しに行ったはずだ。

——静寂が、部屋を満たす。

「……稔くん」

……お願い。

早く目を開けて……！

強くそう祈った。

と、その時。

「やっと咲子のやつ、出てったか」

………はい？

今何か、聞こえた？

……っていやいや！

み、稔くんの声じゃない！！

「み、稔くん！？」

「よ、美央ちゃん」

そこには目を開け笑っている稔くんがいた。

見慣れた稔くんの、見慣れた悪戯な笑顔。

「起きてたの！？」

「まあ、ね。咲子なかなか出てかねーんだもん。もう少し遅かったら寝ちゃうとこだった」

そう言って笑う稔くんは、いつものやんちゃな少年だった。

それを見た私は、どっと安堵してしまう。

「よ……よかったあ……」

へなへなと力が体から抜けていく。

思わず、稔くんの寝る布団にもたれかかってしまった。

そんな私を見て、稔くんは笑い……そして申し訳なさそうな顔ををした。

「美央ちゃんごめんね……守れなくて」

そう言った稔くんの声は、どこか沈んでいた。

私は慌てて身を起こして、ぶんぶんと首を横に振った。

「そんなことない！」

稔くんが謝る必要なんて、どこにもなかった。

それどころか、私が謝るべきなのに！

「でも俺、情けなかったよな……やられてたし」

稔くんらしくない沈んだ台詞。

その時私は初めて、稔くんが落ち込んでいることに気付いた。

稔くん……そんな顔しないで。

だって私。

あの時稔くんがナイトに見えたくらい、カッコいいって思ったんだよ？

「情けなくなんかないよ……っ。稔くん、私のこと守ってくれたじゃない」

そう、小さな背中。

大きく守ってくれた。

それがどれだけ嬉しかったか……稔くんはわかってないよ。

「ごめんなんて言わないで……言うなら私だよ。ごめんね」

「美央ちゃんが謝ることないよ！美央ちゃんは何も悪くないっ」

……ありがとう、稔くん。

「なら稔くんも謝らないでね？」

「……わかった」

稔くんは頷くと、急に起き上がった。

「稔くん大丈夫？」

「ん、平気。体は何ともないからさ」

身を起こしたら、稔くんと私の視線が同じ高さになった。

顔が近くなって、少しだけ胸が弾む……。

私は思わず目をそらしてしまった。

「美央ちゃん」

「ん？」

呼ばれて私はもう一度稔くんを見た。

そしたら。

唇に何かがぶつかった。

トン、と軽く触れたそれは柔らかく。

それが稔くんの唇だったのだと理解するのに、私はしばらく時間をかけてしまった。

「……………」

……って。

ええええ！？

「み、み、稔くん！？」

思わずどもり過ぎてしまった私。慌てて口を手で覆っても、唇に触れた感触がまだ残っていた。

——軽く、触れられたそれは。

まぎれもなく、稔くんの唇だったんだから……！
(つまりこれって……キ、キス？)

胸が、バクバクしている。

顔がほてっていくのがわかる。

多分私は今、すごく情けない顔をしている。

そんな私を稔くんは真っ直ぐ見つめていて。

そして静かに、言ったんだ。

「好きだよ」

——その言葉は、力強く稔くんの口から発せられた。

いつもの、可愛い稔くんじゃない。

どこかキリッとした印象の彼の瞳が、私を静かに捕らえた。

「……………」

——嘘……、と言いきうようになった。
でも。

稔くんの目があまりにも真剣だったからそれさえも言えなくて、私は言葉を失った。

けれど——稔くんの台詞が。

私の心臓に大きく作用するのに、そんなに時間はかからなかった。すぐにドキドキと胸は高鳴り始めた。

「稔……くん……」

ああ、どうしよう。

何を言ったらいいのかわからない。

嬉しくて夢みたいなのに。

私はバカみたいに稔くんを見つめる他なかった。

すると、おもむろに稔くんがまた口を開いた。

……何故か、拗ねたような口調で。

「俺……みっつも年下で中学生だし、美央ちゃんより背も低いし今日だって美央ちゃんを守りきれなかった」

そう言う稔くんは何故か切なそうに見えた。

稔くん……苦しいの？

心配になりかけた私だったが、稔くんがバツと顔を向けてビックリした。

だって……あまりにも真剣な瞳だったから。

「ホントは……！こんな早く告白するつもりなんてなかったんだ！

」

「え……」

「身長越してからにしようって考えてたのに……美央ちゃんが悪いんだからな！」

バツの悪そうな顔をして、稔くんはぶいっとそっぽを向いてしまった。

私はポカンとして、そしてハッと我に返って反撃した。

「な、何で私のせいなのよ！？」

告白してくれてすごく嬉しかったのに、何で怒られるの！？不満げな私に、稔くんはちらりと目を向けてこう言った。

「……美央ちゃん俺のこと好きってわかりやす過ぎ。好きな子からそんな態度取られたら告白したくなるっしょ」

「なっ……」

かぁ、と顔が赤くなったのがわかった。

わ、私ってそんなバレバレだった!?

「なのに素直じゃないから俺に気のないフリするし。まったくあまのじゃくなんだから」

「な……な……」

さながら今の私は金魚のよう。口をぱくぱくさせるしかない。

何……何なの。

てことは私の気持ちは全部、稔くんにもろバレだったってこと!?

(う……嘘でしょ!) 何か私すごいマヌケじゃない?

けれどそんな私に告白してくれた稔くんが、ちらりと私を見た。

その瞳に、いつもの悪戯っ子っぽい光を宿して……。

「美央ちゃん」

「は、はい!？」

何故か敬語になる私。

そして稔くんは天使のような笑顔になると、こう言ったんだ。

「いい加減素直になって、俺に好きって言ったら?」

………前言撤回。

こんな俺様な天使、いるもんかぁ!!

8 \ H A P P Y E N D ? \

こうして。

私はめでたくも稔くんと付き合うこととなった。

だから今の私は幸せいっぱい！

……のはずが。

「だからいい加減言いなよー！」

「やだやだ！ぜーったい言わない！」

「まったく、美央ちゃんは強情だなあ」

いまだ、私に告白を要求する稔くん。私が稔くん大好きって、わかってるくせに。

そりゃ、言わない私が悪いってことくらいわかってる。

好き……って言われることがどんなに幸せなのか、私は知っているから。

稔くんに教えてもらったから。

だから私だって稔くんに好きって、言いたい。

でも。

でも——！

「こら稔！いい加減にしなさいっ」

「ハッハッ、咲子ちゃんいいじゃん好きにさせれば」

海の帰りの車の中でまでそれを要求されるのは、困るのー！

今はおにいちちゃんが運転席、咲子が助手席に座り、後ろの私たちの

やり取りを見守っていた。

だからもちろん、二人には私と稔くんが付き合い始めたことはモロバレなのである。

「稔くん、お願いだから今はやめて〜っ」

何が楽しくて親友や兄の前で告白をしなきゃいけないのか。困りきった私に、稔くんは不満げだ。

「じゃあ二人になったら言ってくれるね？」

う……、とつまった私だったけれど、慌ててコクコク頷いた。

とにかく約束しなきゃ、稔くんずーっと車の中で言っそうだし。すると稔くんは安心したのか、寄せていた眉を弛緩させた。

私の好きな、にっこり笑顔だ。

「ならよし」

(あ…………)

ドキッとした。

やっぱり稔くんは、笑顔が一番いい。

そう思うだけで私の胸はますますドキドキして。

稔くんと恋人になれた幸福感が、今更ながらに胸を満たした。

ああ……やっぱり稔くんが大好きだ。

元気な笑顔も。

ちょっと意地悪なところも。

実は誰よりも他人に優しいところも。

そして……私を一途に想ってくれるところも。

全部全部大好き。

まだ素直になれない私だけど、今なら言える気がして。

私は前の二人に聞こえないように、こそつと稔くんに耳打ちをしたんだ。

「稔くん」

「ん？」

——その後。

喜びすぎて私に飛び付いてきた稔くんのせいで、車体は大きく揺れたのであった。

まだまだ素直にはなれない私。

でもね、素直になれる魔法が見つかりそうな予感なんだ。

大好きな君のその笑顔の中に。

………何てね。

☆END☆

8 \ H A P P Y E N D ? \ (後書き)

まずは、長い放置期間をお詫び申し上げます（汗）この小説は前置きでも申し上げたとおり、「キレイの魔法」番外編で、自サイトで書き上げたものを投稿させていただきました（へーへ）「キレイの魔法」のおまけ感覚で楽しく読んでいただけたのなら嬉しいです♪読んでくださり、どうもありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9211a/>

素直の魔法

2010年11月20日02時58分発行